

群 教 七	H01 - 01
	平15.214集

進んで身近な自然にかかわって遊ぶ 幼児の育成

— 土・砂・水に触れて遊ぶ場面に応じた環境の構成の工夫を通して —

特別研修員 籾山 まり子 (桐生市立天沼幼稚園)

I 主題設定の理由

最近の幼児たちは、自然に直接かかわって遊ぶ経験が少ない。自然環境や社会環境の急激な変化、テレビゲームやビデオなどの普及が幼児の遊びに大きな影響を及ぼしている。

幼児は、自然に直接かかわって遊ぶことにより、自然に対する興味や関心を高め、さらに探求心を深めていく。また、自然に直接かかわって遊ぶことを繰り返すことで、幼児は気づいたり驚いたりしたことを友達や教師に伝えながら、友達関係や遊びを広げたり深めたりしていく。そのことは豊かな感情・好奇心・思考力・人間関係などの基礎を培うために大切な経験であると考えられる。このように幼児期に自然に直接かかわって遊ぶことは、豊かな人間性を培う上で欠くことのできないものである。

本園は、自然に親しめる環境に恵まれている。マテバシイやサクランボなどの樹木や四季折々の草花が豊かにある。また、アリ・ダンゴムシ・バッタなどの虫が園内で見つけられ、ジャガイモやサツマイモ・大根などの野菜を栽培できる畑があり、自由に使える砂場や二つの土山がある。

本学級は、2年保育の進級児 18 名と1年保育の新入園児 1 名の5歳児の学級である。ほとんどの幼児が気の合う友達と一緒に興味をもった遊びに取り組みながら、幼稚園生活を楽しんでいる。幼児は特に、園庭にある砂場や土山での遊びに興味を示し、土・砂・水に触れ、指の間からサラサラと落ちる土や砂の感触の気持ちよさを肌で感じながら、繰り返し遊んでいる。また、水を入れてかき混ぜてドロドロになった土や砂でケーキを作ったり、全身で触れて遊んだりする姿も見られる。しかし、幼児一人一人をよく見ると、手足や衣服が汚れることを気にして友達の遊びの様子を見ていたり、あまり興味を示さない幼児もいる。

これまでの保育を振り返ってみると、土・砂・水にかかわって遊んでいる幼児への環境の構成については、幼児の活動の様子やその日の天候から道具の種類や数を精選する配慮をしてきたが、その後は幼児任せになってしまうことがあり、幼児の興味や関心を高めたり、遊びを広げたり深めたりするような工夫が足りなかったのではないかと反省させられる。

そこで、本研究では、土・砂・水に触れて遊ぶ場面に応じた環境の構成の工夫を通して、進んで身近な自然にかかわって遊ぶ幼児を育成したいと考え、本主題を設定した。

II 研究のねらい

土・砂・水に触れて遊ぶ場面に応じた環境の構成を工夫することにより、進んで身近な自然にかかわって遊ぶ幼児が育成できることを実践を通して明らかにする。

III 研究の見通し

- 1 幼児が土・砂・水の感触を味わいながら遊んでいる場面では、遊びの様子に応じて遊具や用具を使いやすいように出したり、教師も遊びに加わり楽しさを共有したりすれば、幼児は土・砂・水に触れて遊ぶことを楽しむようになり、身近な自然に興味や関心をもつであろう。
- 2 幼児が土・砂・水の性質に気づいて繰り返し遊んでいる場面では、気づきや驚きを友達と伝え合う場を作ったり、教師が幼児の気づきや驚きに共感したりすれば、幼児は気づきや驚きを言葉で表現するようになり、身近な自然への興味や関心が高まるであろう。
- 3 幼児が土・砂・水に触れて試したり工夫したりしながら遊んでいる場面では、新しい材料や用具を提示したり、教師が仲間の一員に加わったりすれば、幼児は気づいた性質を生かして、遊びを広げたり深めたりするようになるであろう。

IV 研究の内容と方法

I 研究の内容

(1) 進んで身近な自然にかかわって遊ぶ幼児について

幼児を取り巻く身近な自然には、土・砂・水・石、さらに樹木・草花・虫、小動物、雨や風などたくさんものがある。幼児はそれらの自然に直接かかわることで、大きさ・美しさ・質感・においなどを全身で感じ取ることができる。また、自然に直接かかわってのびのびと遊ぶことで、解放感や充実感を味わうことができ、心がいやされ、気持ちを安定させることができると考える。

幼児は自然に出会い、直接かかわって遊ぶことで、自然に対する興味や関心を高め探求心を深めていく。また、幼児は自然にかかわって遊ぶことを繰り返すことにより、自らの五感を働かせてたくさんの気づきや驚きを体験する。そして、幼児は自然に直接かかわる中で、気づいたり驚いたりしたことを友達や教師に伝え合い、喜びや感動を共有しながら友達関係や遊びを広げたり深めたりしていくのである。

以上のことから、本研究で進んで身近な自然にかかわって遊ぶ幼児とは、身近な自然に興味や関心を持ち、全身で身近な自然を感じ取る経験を積み重ねていく幼児である。そして、気づきや驚きなど心を揺り動かす経験を繰り返し、友達と驚きや感動を伝え合いながら、友達と一緒に遊びを広げたり深めたりしていく幼児であるにとらえた。

(2) 土・砂・水に触れて遊ぶ場面に応じた環境の構成の工夫について

- 土・砂・水は、幼児の身近にあり、いつでも触れることができ、作ったり壊したりしながら繰り返し遊ぶことができる。また、土・砂・水に触れて遊ぶ楽しさを味わうことにより、幼児は自分から積極的に戸外へ出るようになり、他の身近な自然にも興味や関心を持ち、進んでかかわって遊ぶようになると思う。そこで、それぞれの幼児の興味や関心を把握しながら、土・砂・水に触れて遊んでいる場面に応じた環境の構成の工夫をしていくことが必要であると思う。
- この研究における「幼児が土・砂・水に触れて遊んでいる場面」とは、幼児の興味や関心から次のようにとらえている。
 - ・全身で感触を味わい、土・砂・水とのかかわりを楽しんでいる。
 - ・繰り返し遊ぶ中で、土・砂・水の性質について友達から教えてもらったり自分で気づいたりしている。
 - ・気づいた土・砂・水の性質を生かして、友達と一緒に遊びを広げたり深めたりしている。
- 環境の構成を工夫するには、幼児が土・砂・水に触れて遊んでいる場面で、何に気づいて

いるのか、どのようなことにおもしろさを感じているのか、その遊びをどのようにしていきたいのか、など幼児の興味や関心を把握しながら、タイミングをとらえて行うことが大切であるとする。具体的に物的環境の構成としては、かかわってみたいくなるような自然環境を用意する、必要な材料や用具を使いやすいように準備する、気づきや驚きを友達と伝え合う場を作る、新しい材料を提示する、興味や関心が持続するような場を作る、などとする。また、人的環境の構成としては、遊びの楽しさを共有する、気づきや驚きを大切に受け止めたりそのことを幼児と共に確かめたりする、温かい気持ちで共感する、気づきや驚きを深める言葉かける、刺激となるような働きかけをする、仲間の一員となる、などとする。

2 研究の方法

研究の見通しに基づき、以下のような計画で保育実践を行い検証する。

(1) 実践計画

対象	桐生市立天沼幼稚園 1・2保育5歳児 18名(男児9名・女児9名)
期間	平成15年6月～11月

(2) 検証計画

検証項目	検証の観点	検証の方法
見通し1	幼児が土・砂・水の感触を味わいながら遊んでいる場面で、遊びの様子に応じて遊具や用具を使いやすいように出したり、教師も遊びに加わり楽しさを共有したりしたことは、幼児が土・砂・水に触れて遊ぶことを楽しむようになり、身近な自然に興味や関心をもつために有効であったか。	・幼児の表情、動き、言葉、友達関係、遊びへの取り組み方などから、物的・人的環境の構成の工夫を通して、幼児の変容をとらえる。
見通し2	幼児が土・砂・水の性質に気づいて繰り返し遊んでいる場面で、気づきや驚きを友達と伝え合う場を作ったり、教師が幼児の気づきや驚きに共感するようにしたことは、幼児が気づきや驚きを言葉で表現するようになり、身近な自然への興味や関心を高めるために有効であったか。	
見通し3	幼児が土・砂・水に触れて試したり工夫したりしながら遊んでいる場面で、新しい材料や用具を提示したり、教師が仲間の一員に加わったりしたことは、幼児が気づいた性質を生かして、遊びを広げたり深めたりするようになるために有効であったか。	

V 研究の展開

1・2年保育5歳児の教育課程Ⅶ期、Ⅷ期、Ⅸ期において実践する中で、「身近な自然とのかかわり」に視点を当てて幼児の実態をとらえ、ねらい・内容に即して物的・人的環境の構成を工夫していくことで、その有効性を明らかにしていく。

1 Ⅶ期・Ⅷ期・Ⅸ期の指導計画 (桐生市立天沼幼稚園教育課程より抜粋)

期	Ⅶ期(6月～7月)	Ⅷ期(9月～10月)	Ⅸ期(11月～12月)
ね ら い	○身近な自然にかかわって遊び、自然への興味や関心をもつようになる。	○身近な自然にかかわって遊ぶことを繰り返しながら、自然への興味や関心を高めるようになる。	○自然の変化に気づき、興味や関心をもって試したり工夫したりして遊ぶようになる。

内 容	<ul style="list-style-type: none"> ・戸外で砂や水に触れて遊ぶ楽しさを味わう。 ・小動物を飼育し、その形や動きに関心をもつ。 ・夏野菜や草花の世話をし、収穫を喜ぶ。 ・雨の降る様子を見たり、雨音を聞いたりする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・友達と虫取りをして、飼育する。 ・種取り、ドングリ拾い、落ち葉拾いなどをして、集めたり使って遊んだりする。 ・同じ興味や目的をもった友達と誘い合って一緒に遊ぶ。 ・友達と相談しながら、遊びを進める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・色づいた木の葉や空の色や雲・冷たい風など身近な自然の変化に気づく。 ・友達と一緒に身近な自然に繰り返しかかわって遊ぶ。 ・遊び方を考えたり、友達と相談したりしながら遊ぶ。 ・友達のよさや考え方を受け入れたり、認め合ったりしながら遊ぶ。
--------	--	---	---

2 各場面における具体的な姿と環境の構成の視点 ◆物的環境の構成 ◇人的環境の構成

場 面	幼児が土・砂・水の感触を味わいながら遊んでいる場面 (見通し1)	幼児が土・砂・水の性質に気づいて繰り返し遊んでいる場面 (見通し2)	幼児が土・砂・水に触れて試したり工夫したりしながら遊んでいる場面 (見通し3)
具 体 的 な 姿	<ul style="list-style-type: none"> ・土・砂・水の感触を味わい歓声をあげながら遊びを楽しんでいる。 ・友達のおもしろそうな遊びを見たりまねしたりする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・繰り返し土・砂・水に触れて遊ぶ中で、気づきや驚きを言葉で表現している。 ・友達と一緒に遊ぶ中で、思いを伝え合っている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・繰り返し土・砂・水に触れて遊ぶ中で、興味や関心を持続させている。 ・遊び方を考えたり友達と相談したりしている。
環 境 の 構 成 の 視 点	<ul style="list-style-type: none"> ◆気の合う友達と一緒に遊びを楽しめるよう、遊びに応じて遊具や用具を使いやすく出しておく。 ◆手足を洗ったり服を着替えたりできる場を準備する。 ◇教師も遊びに加わり、楽しさを共有する。 ◇遊びへの抵抗感をもっている幼児に刺激となるような言動を工夫する。 	<ul style="list-style-type: none"> ◆繰り返し遊べる場や時間を十分に確保する。 ◆気づきや驚きを友達と伝え合う場を作る。 ◇幼児の気づきや驚きに温かい気持ちで共感する。 ◇幼児の気づきを一緒に確かめる。 ◇幼児の気づきや驚きを深めるような言葉をかける。 	<ul style="list-style-type: none"> ◆遊びが広がったり深まったりできるように、新しい材料や用具を提示する。 ◆幼児の興味や関心が持続するような場を作る。 ◆幼児の刺激となるように関連した本を出しておく。 ◆仲間の人数が増えるに従い、遊びの場を広げていく。 ◇必要に応じて仲間の一員に加わる。

VI 研究の結果と考察

1 幼児が土・砂・水の感触を味わいながら遊んでいる場面で、遊びの様子に応じて遊具や用具を使いやすいように出したり、教師も遊びに加わり楽しさを共有したりしたことは、幼児が土・砂・水に触れて遊ぶことを楽しむようになり、身近な自然に興味や関心をもつために有効であったか

砂場で、6名の男児が山を作っている。そこにA児が参加してきて、「山にトンネルを掘ろう。」と言う。A児の提案に他の幼児も賛成する。その状況から、教師はトンネル作りができるよう小さめのシャベルを3本出す。すると、他の3名の幼児が先にシャベルを手にしたため、A児は「僕のシャベルがない。」と言う。B児が「順番で使おうよ。」と言い出し、シャベルを交替で使ってトンネルを掘り始める。A児も納得する。トンネルが開通すると、B児がそこに水を流す。すると「きゃあ。」と歓声があがり、次々に水を流す。水はどンドンと広がり、

「川ができたよ。」とB児が言う。C児が裸足になり川の中に入り、「気持ちいい、川の中に裸足で入るとすっごく気持ちがいいよ。」と言う。C児の言葉に刺激を受けて、その場で一緒に遊んでいた全員の幼児がC児のまねをして裸足になる。「冷たい、気持ちいい。」と、裸足で砂場中を駆け回る。遊びを見ているD児を意識して教師も裸足になり、幼児と一緒に川の中に入って「気持ちいいね。」と大きな声で言う。すると、そばで見っていたD児が「やってみよう。」と言い、裸足になって遊びに参加してくる。A児が「川が海になっちゃった。」と大声で叫ぶ。「わあい、わあい。」とみんなでばしゃばしゃ歩く。「足がザラザラする。」「足が埋まって見えなくなっちゃった。」と口々に言いながら、しばらく歩いたり走ったりする。トンネルは踏まれて壊れてしまっても気にせず、どの幼児も遊びを続けている。今まで汚れることに抵抗感をもっていたD児であるが、この時は楽しそうに友達と一緒に遊び続けていた。

滑り台の下でアリを集めて「家族ごっこ」をしている。滑走終了地点にくぼみができている。D児は、そこに水を入れて「アリさんのおふろだよ。」と言う。すると、E児が「わたしもおふろに入っちゃお。」と裸足になり水の中に足を入れ、「ぬるぬるして気持ちいい。」と言う。E児の言葉を他の幼児にも聞こえるようにと、教師は「ぬるぬるしているんだ。気持ちいいね。」と繰り返す。すると一緒に遊んでいた幼児が次々にアリさんのおふろに足を入れ始める。教師も「まぜて。」と裸足になり一緒に水の中に足を入れる。そして「アリさんのおふろは、気持ちがいいね。」と言う。E児は「先生、アリさんは小さいから踏まないように気をつけてね。」と言う。C児は、うれしそうに「みんなが入ったんで、本当のおふろみたいに温かくなってきたあ。」と言う。教師も「C児ちゃんの言う通り、おふろみたいに温かくなってきたね。」と共感する。ここで幼児は、砂とは違った土の感触を味わっているようである。

以上のことから、幼児が砂や水の感触を味わいながら遊んでいる場面では、友達や教師と一緒に感じたことを言い合ったり、友達や教師の刺激を受けて遊び方をまねしている様子が見られた。幼児のトンネル作りをしたいという気持ちをすぐに受け入れて必要なシャベルを出したことで、トンネル作りが水を流して川や海に見立てる遊びにつながり、砂・水に触れて遊ぶ楽しさを味わうことができた。そして教師も遊びに加わり、幼児と楽しさを共有できるように裸足になって楽しい雰囲気盛り上げるようにした。これらの手だては、幼児が身近な自然に興味や関心をもつために有効であったと考える。

また、今まで汚れることに抵抗感を示していたD児は、初めは遊びの様子を見ていたが、自分から「やってみよう。」と言って、他の幼児と一緒に裸足になって土・砂・水に触れて楽しく遊ぶことができた。このことは、友達や教師が楽しそうに遊ぶ姿に刺激を受けたからであると思われる。その時の経験が滑り台の下での遊びに生かされて、自分からくぼみに水を入れて遊ぶことにつながったと思われる。D児にとっては無理に誘うのではなく、刺激となるように言葉や動きで働きかけをしたことが有効であったと考える。

2 幼児が土・砂・水の性質に気づいて繰り返し遊んでいる場面で、気づきや驚きを友達と伝え合う場を作ったり、教師が幼児の気づきや驚きに共感したりしたことは、幼児が気づきや驚きを言葉で表現するようになり、身近な自然への興味や関心を高めるために有効であったか

F児は毎日継続して「泥団子作り」に取り組んでいる。初めは砂で団子を丸めようとしていたが、すぐに崩れてしまい困っていた。同じクラスのG児に「こっちの泥を使いなよ。」と教えてもらう。F児は、G児に教えてもらった土で丸めると思い通りにできたので、驚いて「わあ、こっちの泥の方がずっといいや。」と大きな声で言う。そして「泥団子は、砂じゃだめなんだ。」とつぶやきながら、泥団子を大事にプリンカップに入れたり出したりしながら乾いた白い土をかけ、繰り返し磨きをかけている。

前夜の雨でF児は乾いた白い土が見つからず、「白い泥がない、どうしよう。」と教師に聞

きに来る。教師も「困ったね、どこにもないね。」と言いながら園庭中を見回す。すると、そのやりとりを聞いていたH児が「わたし、白い泥がある所を知っているよ。」と言うので、H児について行ってみると、遊具物置の中に乾いた白い土があった。F児と教師と一緒に「ほんとにあるね、ありがとう。」と喜んだ。その喜び方にH児も満足そうな表情である。F児は早速、遊具物置の中の白い土をかけて、泥団子を磨き始める。F児は「H児ちゃんが教えてくれて、ああよかった。」と言う。

I児は「泥団子のもと、見つけた。」と教師に知らせに来る。教師が「どこにあるのかな。」とI児に尋ねると、I児は「ブランコの下の水たまりの中だよ。」とブランコの方を指さして言う。教師がブランコの所に行ってみると、下のくぼみにドロドロの土がある。教師と一緒に来たH児は「雨が泥団子のもとを作ったんだよ。」と得意そうに言う。「どうして、この泥んこがいいの。」と教師が聞くと、そばで見っていたM児は「だって、サラサラした砂で作るとすぐにこわれちゃうもん。ドロドロでなくっちゃだめだもん。ぬれていないと形ができないんだよ。」と自信をもって話す。「よく知っているね、ぬれていないとできないんだ。I児ちゃん、H児ちゃん、M児ちゃん、みんなすごいね。」と教師は驚きながら共感する。そのやりとりを聞いていた5名の年少児が、H児の後について「一緒に泥団子を作って。」と追いかけている。H児は、うれしそうに泥団子を作りながら、年少児に作り方を教えている。

以上のことから、F児は友達とのかかわりの中から、泥団子のもとは砂よりも土がよいことや、雨上がりの園庭には乾いた土がなくて遊具物置の中にあることの情報を知ることができた。また、G児・H児・I児・M児たちは、今まで泥団子作りに繰り返し取り組んできて、その経験の積み重ねから自分なりに獲得した泥団子の作り方を、一生懸命に自分の言葉で友達や教師に伝えることができた。このように幼児が土・砂・水の性質に気づいて遊んでいる場面では、幼児が安心して気づきや驚きを伝え合えるような場を作ったり、温かい気持ちで共感したり、友達に伝える仲介役となったりする教師の手だては、幼児が気づきや驚きを言葉で表現するようになり、身近な自然への興味や関心を高めるために有効であったと考える。

3 幼児が土・砂・水に触れて遊ぶ中で、試したり工夫したりしながら遊んでいる場面で、新しい材料や用具を提示したり、教師が仲間の一員に加わったりしたことは、幼児が気づいた性質を生かして遊びを広げたり深めたりするようになるために有効であったか

F児が一つの泥団子を大切に、園庭のいろいろな場所の乾いた土をかけたり、友達から教えてもらったことを聞いて試したり工夫したりしながら磨きをかけている。教師は幼児への刺激となるように、さりげなく幼児の目にとまるように「どろだんご」「どろんこであそぼう」の本を出しておく。次々に幼児が本を見始める。F児も仲間に入り、他の幼児と一緒に見ている。F児が「この本みたいに色が付いた泥団子が作りたいなあ。」と教師に言う。「どうしたら色が付けられるのか一緒に考えようね。」とこたえる。しばらく考えてから「色の粉を使えばいいんだよ。」とF児が言う。「あっ、そうだね。色の粉を調べて、買ってくるね。」と投げかける。F児は、大変うれしそうな表情で「先生、お願いだよ。」と言う。

F児は毎日「色の粉はまだかなあ。」と言いながら繰り返し泥団子作りをしている。そして色の粉を楽しみに待っている。そして、本も繰り返し見ている。

ある日、M児が「色の粉が早くほしいなあ。」と言う。教師はF児の毎日色の粉を待っている気持ちとM児の発言を考え合わせ、今が色の粉を出す絶好のタイミングであるにとらえた。教師はF児を呼んで「色の粉を買ってきたよ。」と青い粉を提示する。2名の幼児は大変喜んでいる。しかし、前日の雨で、青い粉を混ぜる乾いた土が見つからない。「困ったね。」と教師も2名の幼児の気持ちに共感する。その様子を見ていたJ児・K児が「私たち乾いた泥をもってよ、あげるからね。」と言って今まで大切に牛乳パックに集めていた乾いた土を出し始

めた。大喜びで「ありがとう。」と言うF児・M児にJ児・K児も満足そうである。早速F児・M児は乾いた土と青い粉を混ぜて今まで作っていた泥団子にかけてこすっている。教師も仲間になって色付きの泥団子作りをする。泥団子が少しずつ青く変わっていった。それを見ていたJ児・K児もまねをして乾いた土と青い粉を混ぜて泥団子にかけている。「やったあ、青い団子ができた。」と言うF児の歓声を聞き、次々に興味をもった幼児が集まってくる。そして青い色の泥団子を見て驚き、「まぜて。」と参加してくる。教師は参加者が増えるに従い、青い粉を追加して出したり、活動の場を広げたりした。また、幼児一人一人の取り組み方を認めて「すごいね、だんだん青くなってきたね。」「きれいな泥団子ね。」「今まで見たことない泥団子だね。」などと言葉をかけた。F児は「もっとサラサラの泥を使いたい。」と言って砂場で使ったことのあるふるいを思い出し、乾いた土をふるいにかけてから使っている。F児は「土からけむりが出るといい土なんだよ。」と本にあったことをつぶやきながら、「あっ、けむりが出た、出た。これはいい土になったんだ。」と喜びながら青い粉を混ぜている。他の教師も2名やってきて、「すごいことをしているね。その青いお団子を見せてね。」「この青いお団子は、どうしたらできるのかなあ。」などと声をかけている。F児は得意そうな表情で、乾いた土と青い粉を混ぜて泥団子にかけて「こうすると、青い色が付いた泥団子ができるんだよ。」と説明をしている。年長児たちのしていることに興味をもった年少児も7名参加してくる。しばらくすると、それぞれがプリンカップにティッシュを敷き、その中に青い泥団子を大切にしまっている。「今度は赤い泥団子が作りたい。」「僕は黄色がいいな。」と口々に気持ちを話している。教師は「明日もしようね。」と期待できる言葉をかけた。

以上のことから、友達からの情報も聞いて毎日繰り返し自分なりに試したり工夫したりしながら、泥団子作りをしていたF児は、教師が用意した本に刺激を受け、今まで経験していなかった色付きの泥団子を作ることに興味をもった。教師はどうしたら泥団子に色が付けられるのかをすぐに教えずに、F児に考えさせたり他の幼児の様子も見たりしながら、タイミングをとらえて色の粉を出すようにした。F児は、自分の思いが実現したことで充実感を味わうことができたようだ。このように幼児が試したり工夫したりしながら遊んでいる場面で、遊びに関連した本を出したり新しい材料を用意したりしたことは、幼児の遊びを広げたり深めたりするために有効であったと考える。また、教師も仲間の一員となり一緒に考えたり色付きの泥団子を作ったりしたことは、幼児の興味や関心をさらに高め、F児以外の幼児にも活動意欲をもたせることにつながった。幼児が今まで知り得た土・砂・水の性質を生かし、さらに色付きの泥団子を作ることに興味をもち実現させることができたことから、人的環境としての教師の働きかけも遊びを広げたり深めたりするために有効であったと考える。

Ⅶ 研究のまとめと今後の課題

- 進んで身近な自然にかかわって遊ぶ幼児を育成するために、土・砂・水に触れて遊ぶ場面に応じた環境の構成を工夫してきた。その結果、個人差はあるが、友達からの刺激や教師の働きかけによって、どの幼児も土・砂・水に触れて遊ぶ楽しさを味わうことができた。幼児一人一人の興味や関心を把握しながら、場面に応じた環境の構成の工夫をしたことは、幼児が進んで身近な自然にかかわって遊ぶことにつながったものと考えられる。
- 環境の構成の工夫として、幼児の興味や関心を把握しながら、タイミングをとらえた遊具や用具の出し方、新しい材料の提示の仕方など物的環境の構成を工夫すること、一緒に活動しながら楽しさを共有している友達や教師などの人的環境の構成の大切さなどを確認することができた。
- 教師が仲介役となって、幼児が遊びの中から知ることができた情報を友達と伝え合えるよ

うにしたことで、幼児は友達から認められて自信をもち、友達関係や遊びを広げたり深めたりすることになったと考える。

- 今後は、土・砂・水以外の身近な自然にも視点を当てて、さらに幼児が身近な自然に興味や関心をもって遊べるように、自園の豊かな自然環境を生かすような環境の構成の工夫について探っていきたいと考える。

〈参考文献〉

- ・ 神長 美津子 著 『保育の基本と環境構成』 ひかりのくに出版（2000年）

